

# 浄 土

monthly  
JŌDO

1998 October

10





# テレコムしよう。



コミュニケーションの未来へ  
**日本テレコム**

お申し込み、お問い合わせは  
お客様センターへどうぞ

 **0088-82** (無料)

[受付時間] 9:00~23:00 (年中無休)

インターネットホームページ: <http://www.japan-telecom.co.jp/service/>

国際電話は **0041**、市外電話は **0088** でテレコムしよう。

寺院紀行

寺に歴史あり

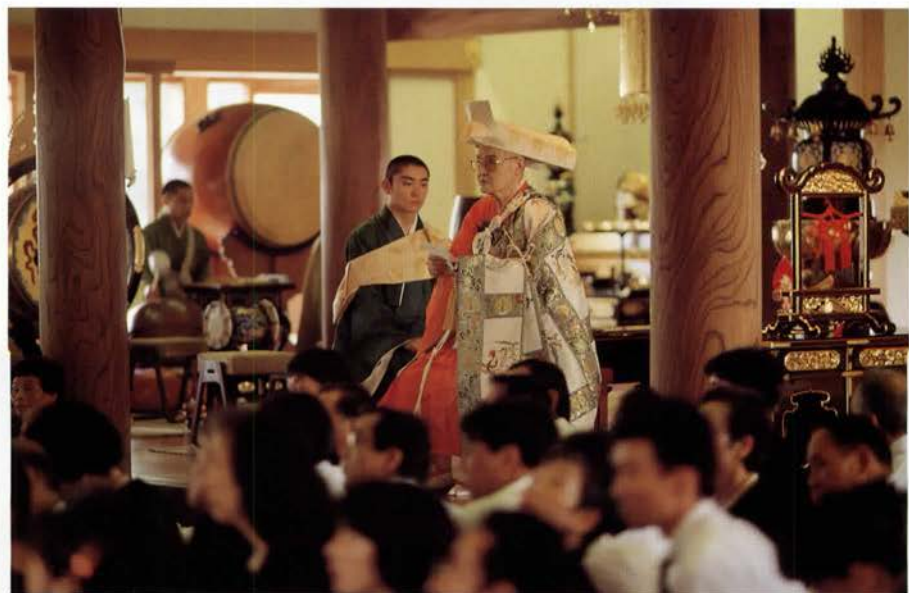
人々に信仰あり

日本列島の数々の寺院を紀行する

# 報国寺

茨城・水海道

施餓鬼会でお参りにきた檀信徒のみなさん。  
平成9年に完成した本堂



施餓鬼会法要導師、成田有恒住職



本尊わきにかけられて  
いる知恩院御門跡の書

## 水海道 報国寺

向かって左の本尊わきには寢釈迦像が祀られている



境内に残る南北朝時代の板碑。  
光明真言が彫られている

観光名所の「水海道あすなろの里」は同市西端の菅生沼に広がる





貴重な資料を今に伝える、  
日本三天神のひとつ大生郷天宮

関東鉄道常総線の水海道駅。取手と下館を結んでいる



手前が客殿と書院。この九月に完成したばかりだ



素敵な笑顔で案内してくれた  
報国寺瀬戸隆海副住職

# 浄土

1998/10月号 目次

|                  |           |    |
|------------------|-----------|----|
| カラグラフィア寺院紀行「報国寺」 | 写真＝タカオカ邦彦 | 3  |
| 報恩の心を育てる         | 宮林昭彦      | 8  |
| 鎌倉光明寺の十夜法要       | 北邨謙順      | 14 |
| 十夜の月             | 勝崎裕彦      | 18 |
| 寺院紀行 茨城・水海道「報国寺」 | 真山 剛      | 24 |
| 表紙は語る            | 川井 聡      | 33 |
| 連載 選択集を拝む（四）     | 須藤隆仙      | 34 |
| 連載 身障者から学ぶ       | 高木悦男      | 42 |
| 御法語に聴く           | 袖山栄輝      | 48 |
| コラム 仏教歳時記        |           | 53 |
| 連載 無明抄           | 秦 恒平      | 54 |
| Jフォーラム           |           | 61 |
| 事務局便り            |           | 69 |
| 編集後記             |           | 70 |



表紙題字＝浄土門主 中村康隆宛下  
 表紙撮影＝川井 聡  
 アートディレクション＝近藤十四郎  
 協力＝迦陵頻伽舎

# 報恩の 心を 育てる 十夜会によせて

大正大学人間学部学部長  
横浜大光院住職

宮林昭彦

現代においては人の誕生や、生きることについて、余り感動や不思議とは感じられなくなりました。人間が生まれ、生きることとはあたりまえと受けとられているからです。しかし人間として誕生し、この世に生きすることは、なかなか至難なことでもあります。お腹のなかで育てながら、途中で水子として冥に葬られたり、この世に生まれながら、二、三か月の愛らしい生命が、黄泉の国へ旅だつてしまうような体験をした若い母親のちに、「この世に生を受けることは、大変なことですね」と涙ぐみながら語る言葉に、はじめて受け難い人身の実感をうかがうことができます。

生命の尊厳性が叫ばれながら、本当のいのちの大切さが分からず、粗末に扱われるのは、いのちの根源が分からないからでしょう。昔から「命あつてのもの種」といわれますが、いのちがあればこそ、生きられるのです。

いま年齢は、一般的に満年齢で数えますが、以前は数え年で算えました。先日ラジオ放送で、永六輔さんが誕生にまつわる話をしていました。

彼があるとき、映画解説の淀川長治さんの誕生日祝いをしようと仲間を誘って淀川さんを招いたら、「その日は都合が悪いな」といわれました。

「なぜですか」と言うとうと、

「永さん、僕は誕生日には必ず母親のお墓参りをするにしているんだよ」ということでした。そして

「世間では満年齢で数えるが、僕は数えて年齢をいうことにしている。普通はこの世に生まれ出た日から数えるが、もともと僕らのいのは母親の体内に十月十日宿り、母の愛によつて育てられ、しかも母は百筋を断ち切つて苦しんで、この世に僕を生み出してくれたんだ。このことを思うと母がいとおしくて、誕生日には母を偲んで墓参りすることに決めているんだよ」といわれた淀川さんの話を伝え、永さん自身も大変感動しながら放送していました。

考えてみますと、お釈迦様は「父に慈恩あり、母に悲恩あり」と説かれていますが、父母の厳しさややさしい愛に育まれて、このいのちがあることに思いを寄せることが大切であります。

江戸時代の思想家鈴木正三が、

「物ごとと他の心にいたれ。人を忘るることなかれ。まず上四恩を知るべし」(『盲杖』)と説いています。「どんなことについても、他人の心になつて行動せよ。周囲の人を忘れてはならない」という意味ですが、恩について仏教のおしえの尊さを述べています。

四恩として正三は、1 天地の恩、2、師の恩、3、国王の恩、4 父母の恩を挙げています。

この四恩については、

「一、父母の恩、二、衆生の恩、三、国王の恩、四、三宝の恩、かくのごとき恩は、一切衆生、平等に荷負す」(『大乘本生心地観経』)

とも説かれています。



かように父母なくしてわたしの存在はないわけです、生の享受も父母のおかげであり、さかのばれば、先祖のいのちを受け継いでいるわが身であります。

そのわたしが生きているのは、家族のおかげ、周囲の人々、社会の人々の恩を受けて成り立っているのが、衆生の恩です。国王の恩というと、戦前の天皇と軍部の結びつきにつらい思い出もありますが、すぐれた王が正しい法によって政治を行い、衆生がみな平和で安楽であるときに恩を感じることです。国家と政治のあり方に思いをよせて、わが民族、国土を誇り、恩を感じるような国造りをねがう心を育てることが必要でありましょう。

三宝の恩は、いうまでもなく仏、法、僧の三宝に帰依し、み仏さまの智慧と慈悲のおし

えに恩とよろこびを感じることです。

正三の天地の恩は、天地大自然の恵みに対する恩ですが、最近、人間が自然を支配して、幸せを獲得しようというエゴがあります。人間は自然とともに生きる存在であり、決して自然を支配し、対立する存在ではないのです。自然に生かされて生きているわたしたちであり、共に生きるのが人間ではないでしょうか。

そもそも恩という文字は、因と心が合体してできており、自らの存在のもと（因）に気づく（心）ことです。



あらためて生きるということは、不思議なことであるということを思います。私の体を支えてくれている目に見えない力、全宇宙に張りめぐらされて、このいのちを育んでいる力の根の広さと大きさを思いますと、気が遠くなるような、不思議さを感じるのです。

この不思議な力の根本こそが、み仏さまということとできましよう。

浄土宗の第三祖良忠上人は、

「仏の光明は仏智より生ずるがゆえに、光明智相という。いうところの智とは、すなわちこれ後得大悲の智なり」（『往生論注記』）

と示されています。「み仏の光明は、仏智から放たれるあかるさであり、この仏智とは、迷いのもとをうち破つて、真実の悟りの智慧の上にもげえるものである。この仏智は、迷える人々のすがたをみきわめて、わけへだてなく、その苦しみをとり除く働きをしておられる。つまり、わたしたちにとってみ仏の光明は、迷えるわたくしたちを救わずにはおれない、み仏の大悲なのである」という意味ですが、このみ仏こそ、阿弥陀如来さまであります。

浄土宗では、秋の収穫の季節に、十夜法要の行事が行われます。その因縁は、

「此において善を修すること十日十夜すれば、他方諸仏の国土において善を為すこと千歳するに勝れたり」(『無量寿経』)

と説かれます。その意味は「最勝にして極善のお念仏を、称えにくいこの世において十日十夜の間称えることは、称えやすいみ仏の国で千年もの間称えるより、量りしれないお念仏の功德がある」ということです。

かように、お念仏を修する功德によって、十日十夜の別時念仏を行することに端を発し、さらに秋の実りの収穫祭の報恩感謝と結びついて今日まで伝えられています。念仏を修することによって、報恩感謝の心を育てるあかしであると思います。

# 鎌倉 光明寺の

## 十夜法要

大本山光明寺前執事長

北邨謙順

十夜じゅうやかな余程よほど寄ろかと母は聞き

(詠風柳多留)

これは江戸時代に作られた川柳で、鎌倉光明寺の十夜に母が参籠さんろうをしていて、そこへ、お嫁にいつてる娘さんが相談に来たところの作であることが分ります。どうしてかといいますと、後の句の「余程寄ろかと……」にあります。寄ろかというのだから何処かに寄ることになる。それは北鎌倉にある「東慶寺」です。この時代「縁切り寺」として江戸の町で誰でも知っていた寺「東慶寺」。そこで「十夜かな」は、光明寺の名が出なくても、江戸に知れ渡っていた鎌倉光明寺の十夜なのです。恐らく夫婦間の問題で娘さんは母親に苦しい胸の中を涙ながらに訴えたものです。一部始終を聞いていた母親が、色々となだめた娘の機嫌きげんは直らない。そこで思い切った母親が「余程寄ろか」と娘にきり出した場面です。

これでお分りのように、江戸の人々が鎌倉光明寺に参ってお籠りをした事実と、江戸以外鎌倉の近郷近在の人々の群参によって、光

明寺は善男善女がひしめいていたのでした。

方々に十夜の内の鉦かねの音

芭蕉

旅に明け暮れた芭蕉が生きた元禄の頃、秋ともなると浄土宗の寺々から十夜の鉦の音を聞いたのです。これは日本各地に十夜のおつとめが行き渡っていたことを伝えていきます。

さて「十夜」はもともと「十日十夜」と出て参ります。無量寿經の下巻に出てきます。

釈尊がお説きになるそのくだりを申しますと「私共が仏の浄土に参る。そこで善根を積むこと千年する。大へんな功德にちがいないが、よく聞くがよい。此の世で善を修すること十日十夜の方が功德が勝れているのです。どうしてかという仏の国土はもともと清浄で善を行することはつまり当り前の事だ。ところが此の世は濁悪じよくあくで不善ふぜんにみちているだろう。善根至難しなんの世に十日十夜に年々念仏大善根を修することの方が尊くありがたいものだと、いうことが分るだろう」と説かれた。浄土の修善

にまして現世の善根を勧められたことは尊いこととあります。

この教えが実行されるのには、時節因縁が必要でした。平安の時代になって、叡山の円仁さま（慈覚大師）が入唐求法をされて帰朝された時、中国五台山の法照禪師という方が、「五会法事讃」を作られ、阿弥陀仏讃歎の法儀をのこされたものを将来され、叡山では常行堂で、それに基づいて引声念仏、引声弥陀経のお勤めをすることになりました。やがて時が流れ室町時代になります。その頃、京都の街中に参籠祈願をする道場として真如堂（真正極楽寺）があり、ここに平貞国という武士が、阿弥陀仏前に参籠すること三日三夜した時、一通の吉報が届きました。それは足利將軍の下での重職・執権職に任ずるといふ事でした。貞国は阿弥陀如来のお蔭と感泣し、時の六代將軍義教の勧めもあつて、更に七日七夜の念仏大善根をつとめ報謝の誠を捧げました。修善の三日三夜と報恩の七日七夜で「十日十夜」のつとめをしました。以来、京の街

に引声念仏と引声弥陀経を称える音声と鉦の音が響き渡りました。

室町時代はやがて暗黒の世を迎えます。応仁の乱から戦国時代に及ぶ戦乱の世となり、京の都も荒廃した全国に群雄蜂起して、戦火は全土に及びこの世はまさに地獄の相を現じます。時の天皇後土御門帝はいたくこの世の有様を悲しみつつ、天下の和平と万民の幸福を切に念じ佛教に帰せられました。その頃、鎌倉光明寺は浄土宗三祖良忠上人によって開創され、関東に於ける念仏の根本道場でありました。九代に長蓮社観誓祐崇上人が在住され、「地藏菩薩の再来」と仰がれておることを聞かれた天皇は、この上人を宮中に招かれて、浄土の法門を聴聞されたのです。時に明應四年の春（一四九五）のことです。天皇はいたく感銘を催され、光明寺を勧願所とされ、天下安穩万民豊樂を願う寺とされました。そして真如堂に伝わる阿弥陀仏讃歎報謝の十夜法要を鎌倉に於て勤めよとお許し下さることになつたのです。祐崇上人帰鎌されるや、その

年の秋、謹んで十日十夜の法要をされることとなりました。爾来今日に至るまで凡そ五百年。連綿として勤修され、年々多くの参拝のもとに、江戸の人々にも及ぶ法要となりました。

昔は陰暦十月を期しましたが、今は陽暦十月十二日夜開白法要に始まり、十五日朝結願法要を以て成満することになりました。間の十三日は詠唱法要と御代理導師による二座の法要。十四日は御代理上人二座と、日中唱導師上人が日中法要を午後二時に勤修されます。開白と結願は光明寺法主のご親修。唱導師等の上人方はご法主に代られまして拂子を頂戴して専心恭敬の念に住して法要を修されるのであります。法要の盛儀と感動は筆舌に尽しがたいものでありますので、有縁の諸上人諸士諸賢各位のご参拝を心から念願申し上げます。

一筋にたのむ心の道しあらば

二つの河の波かかるとも

これは光明寺十夜勅許の祖・後土御門天皇

のお歌であります。この歌には天皇の並並ならぬ念仏信仰が伺えるのであります。「一筋にたのむ心」とは、一心専念弥陀名号のお心、ひたすら一文不知の身になして、一向に念仏する姿であります。「二つの河」とは、二河白道の譬と申しまして、高祖善導これを述べられ宗祖法然上人またこれを説かれた浄土門に於ける要文であります。二河とは貧と瞋の二河で、その中に流転苦悩する身が私共であります。私共の最期の得脱の道は、善惡共に撰取して捨てたまわざる仏に南無阿弥陀仏と帰するばかりということ深く信ぜられた天皇のお心が尊くありがたく頂かれるのであります。天皇のご信仰は、諸国戦乱の中、人々の苦悩を思い、この世の安穩を願われ、この濁世の救いとなる教は究竟大乘の念仏に帰するのみというご信念から「十夜」もまたそのお心に沿い、現当二世の安樂と天下万民の安穩を祈つて今日でも回向文が唱えられるであります。

(神奈川小田原組・西念寺住職)

十  
夜  
の  
月

勝崎裕彦

大正大学・東京女子大学講師

一

お十夜は、浄土宗の寺院にとつては大切な年中の法要行事である。『無量寿経』の教えに基づいて、十日十夜の期間を定めて修する別時念仏会、それが十夜会・十夜法要である。善種を播いて、善根を根づかせ、「南無阿弥陀仏」の称名念仏の功德を積み重ねて、広く善行をすすめて合つて、善心を深める法会である。永享年中（一四二九—一四四一）、伊勢守平貞国が剃髪出家の願を立てて京都・真如堂において三日三夜の参籠をしたところ、靈夢を受けて通世隠棲を思いとどまった。そして、おのずから家督を継承して、家門大いに繁栄したという。この瑞夢に報いて、その後七日七夜の念仏行を修したという故事にならつて、時は明応四年（一四九五）、鎌倉・光明寺第九世観誓祐崇が御土御門天皇の勅許を受けて以来、引声阿弥陀経並びに引声念仏法要を勤めるお十夜の法会が行なわれるようになった。

こうしたいわれからしても、大本山光明寺のお十夜が浄土宗を代表する法要であることはいふまでもないが、この光明寺の引声念仏の十夜に加えて、埼玉鴻巣・勝願寺の塔婆十夜、東京八王子・大善寺の諷誦文十夜は、かつては関東三大十夜と称されて広く信仰されたのである。

ところで、お十夜発祥の寺、京都・真如堂の十夜会は、俗に蛸十夜と称され、夜店で売られる蛸を食べると疫病にかからないという俗信があつた。というのも、俗諺に、「十夜の捨て蛸」「十夜蛸」などのが謂があり、この時分の蛸は味がよくて安いという京都、滋賀地方の言い伝えがある。

二

お十夜は、かつては陰暦十月五日の夜から十五日の朝までという期間で営まれた、文字通り、十日十夜の念仏法要である。俳諧の方では、十夜・お十夜（御十夜）は冬の季節で

あり、まことに豊富な季語を持っている。それらを列記してみると、十夜会・十夜法要・十夜寺・十夜堂・十夜塔婆・十夜講・十夜僧・十夜鉦・十夜鐘・十夜粥・十夜婆・十夜柿などさまざまである。このように十夜に由来する季語が多いのは、名句秀句もそれだけ多いわけであるが、実は、お十夜が広く信仰され、人々によく親しまれていた証しでもあらう。

お十夜は、参籠念仏をゆかりとする法会であるから、夕宵から夜半にかけての十夜寺・十夜堂の風情が、なんといつてもゆかしい。夜の念仏行事の十夜会の情趣が、すでに季語の中に色濃く反映しているのである。ここでは、江戸俳諧の名句をいくつか鑑賞してみたい。

江戸期の句としては、著名な俳人が多く住んだ京都の十夜風景を写し取った作品が多く残されている。

祖父祖母の京にも多き十夜かな 乙由  
下京の果の果にも十夜かな 許六

松尾芭蕉晩年の門人である中川乙由と森川許六の句。元禄・宝永期の時代の作品と考えられるが、この頃の京都の十夜会、乙由は「京都でもお年寄が多いなあ」と実感し、許六は下京区の寺町のあちこち、どのお寺もどのお寺も、そこらじゅうのお十夜であることを報告している。

その京都の上京区、寺町通の浄土宗皈白院第十一世住職を、宝暦六年（一七五六）に継いだのが蝶夢和尚（一七三二—一七九五）である。師僧の般若や法兄の一松が、貞門の流れを受ける米史門であったため、俳句をよくし、とくに蕉門の俳句・俳書を研究し、蕉風の高揚に努めた。天明俳壇の復興には、与謝蕪村、久村暁台と並び称された人で、この三人いずれも京都で活躍した人である。蝶夢和尚はまた、天明の大飢饉の際には粥施行などを行な

い、芭蕉翁尊崇の篤い報恩行とともに、その善行・徳行は広く慕われたのである。その蝶夢和尚の代表句が、

一夜一夜月おもしろの十夜かな 蝶夢

である。十日十夜、一日ずつ変化する月を、おだやかに、おおらかに仰ぎ見る和尚の心には、「月影の歌」を詠まれた法然上人へのはるかなる敬慕の思いがあつたことであらう。

油燈あぶらびの人にしたしき十夜かな 蕪村

十万十夜みほとけの前まへ去さりがたき 暁台

天明期京都の俳諧復興を支えた蕪村と暁台。蕪村の句は、夜の灯火の下で、お十夜の念仏に親しむ善男善女に思いを込めている。暁台は阿弥陀如来の十万世界を照らしたもう光明を十日十夜の念仏の心に受けとめて、今、如来の光明に摂取されて、座を離れがたく合掌し

ている。

人声の小寺にあまる十夜かな 召波  
簀寺や十夜の庭の菊紅葉 几董

ここには、蕪村と親交のあつた黒柳召波と、蕪村一派の重鎮の高井几董の句を並べたが、ここまていずれも京都俳壇の賜物である。

多士済々の芭蕉一門の中でも、向井去来（西）と並んで「東西両奉行」と称されたのが杉山杉風（東）である。

冴えそむる鐘ぞ十夜の場にはの月 杉風

杉風は情操堅固で性格温和、まことに中庸の人であつたというが、「瘦顔に団扇をかざし絶し息」を辞世の句とした人だけに、恬淡とした中にも洒脱の切れ味があり、蕉門十哲の中でも侮りがたい。十夜鐘と十夜月を冴え冴えとしたさまに受けとめて、そこに杉風の目と

耳がある。

人去て暁くらき十夜かな

太祇

箔おいた空や十夜の戻り脚

北枝

門前の松に鳩なく十夜かな

大江丸

門前の家は寝てゐる十夜かな

月居

右の四句は、十夜粥をすすったり、十夜柿に舌鼓を打ったり、十夜婆の居眠りもあつたりして、夜通しの念仏講も一応終わって、夜の明け方を迎えての一句ということである。

炭太祇の句は、暁闇のうちにおしまいとなつた念仏会の後の寂としたじまを写し取つた。立花北枝は、夜明け前の一瞬の空を「箔を置いた」と形容して、お十夜帰りの人々をおおい包んだ。安井大江丸は、十夜念仏の終わりに鳩の声を聞いている。そして江森月居の句は、十夜寺の門前の家々、お十夜帰りの人々が動きはじめても、まだ表戸を閉じている、というふうに私は解したのである。

最後に、ちよつと斜に構えて、横目に眺めた小林一茶の句を挙げておこう。

菜畑や横すぢかひの十夜道

一茶

以上のように、取り上げた佳句はいずれも江戸俳諧の風格を持つている。高名な俳人の淡々とした作句の中に写し取られた景趣は、江戸時代の十夜寺のなつかしくもゆかしいありさまである。お十夜をめぐる、往時の仏教習俗の一齣ひとしなにはのかに触れる時、今あらためて十夜法要の長い伝統に心を深くするのである。

### 三

近・現代のお十夜の秀句も、もとより数は多い。

運び来る僧皆若し十夜粥

石鼎

合点首ばかりしてゐて十夜婆

静雲

くさめ聞く寒さうつりや十夜堂

爽雨

お十夜のはすみてゐざる木魚かな

鳥三公

月の野に十夜の鐘がひろごれる

春齡

どの句にも、お十夜のおおらかで温かい風趣が的確に示されている。老若男女が相ともに、相和して、十夜念仏を称名称揚して行く中で、止悪修善の心が強められ、深められ、まさに善男善女の名にふさわしい念仏信者となっている。

月影や外は十夜の人通り

子規

これは、近代俳句の創始者である正岡子規のあまりにも有名な句である。念仏の元祖さま、法然上人の教えを受けて、月影の慈悲の光の中に、そこはかとなく温かい十夜道のにぎわいが伝わってくる。

私は今、十夜鉦を遠く近く聞きながら、「十夜月高くあります田満相」と十七文字を並べて、お十夜の心を育みたい。

(東京城西組・香蓮寺副住職)

藤井實應著 ■ 藤井正雄編

# 一筋の道を求めて

— 祖師との出会い、父と子の人間像 —

A5判・並製

本文250頁

定価2,300円〈税込〉

株式会社文化書院

千代田区飯田橋4-5-4

102-0072

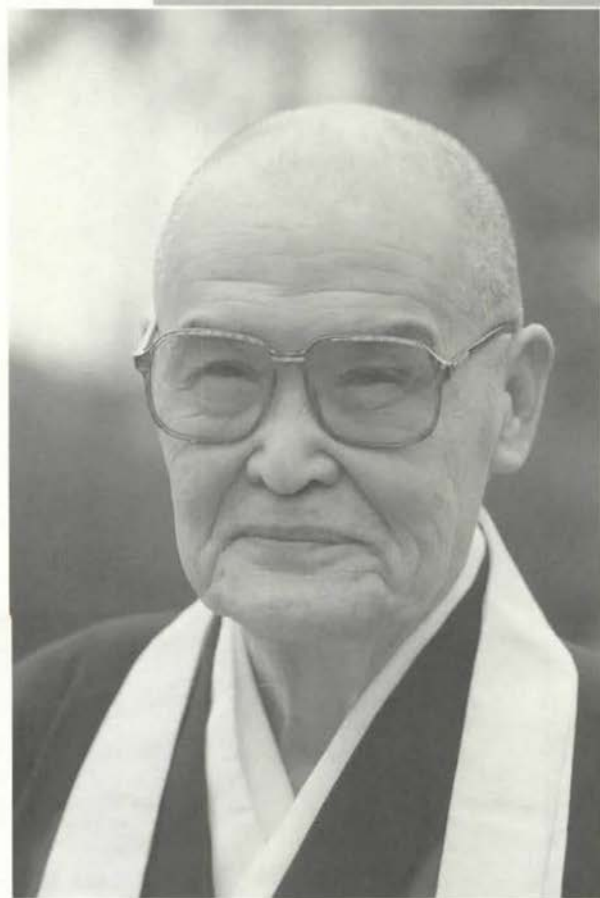
TEL. 03-3261-0480

FAX. 03-3261-0479

# 報国寺

茨城・水海道

## 寺院紀行



撮影／タカオカ邦彦  
文／真山剛

“報国寺の看板スター”成田有恒住職。東京世田谷の大吉寺の住職でもあり、浄土宗宗務総長、ペンネーム寺内大吉でも活躍をされている

寺内大吉という名前をご存じだろうか。名前は聞いたことがあるが記憶がいまひとつ、という方は写真を見れば思い出されるかもしれない。

本名は成田有恒、現在は浄土宗の宗務総長という要職に就かれているが、かつてはキックボクシングや競輪の解説でテレビ出演、また、ペンネーム寺内大吉で直木賞を受賞されるなど八面六臂の活躍をされている現代の快僧である。

成田上人は今も文筆活動をされているが、そのペンネーム寺内大吉は、生まれ育った東京世田谷の大吉寺からとったものだ。

寺内の大吉と誠にわかりやすい命名だ。

そしてその大吉寺の住職をすでに五十有余年されている成田上人だが、実はもうひとつ住職をされている寺がある。

茨城県は水海道市にある報国寺という名刹である。

この寺院紀行で茨城を訪れるのは初めてだが、報国寺のある水海道には県内に百一カ寺ある浄土宗寺院のうちの十六カ寺が集まっていたり、また浄土真宗の開祖、越後に流された親鸞聖人が関東に迎え入れられたのもこの茨城で、鎌倉時代から戦国時代にかけて念仏の声が朗々と響いた地である。

作家寺内大吉こと成田住職は、近著『念仏の叛乱』でこうした茨城での親鸞聖人とその教団の行方を追っている。やがて階級闘争へ

と向かう門徒と親鸞聖人のすれ違いはとても興味深い。

と、同時にこうした取材を通して、法然上人の非暴力性に注目し、それを積極的に活字や言葉にしているという。宗務総長と作家、そして二カ寺の住職といくつもの顔を持ちながらも、やはり浄土宗の責任者として宗門の発展に意を注いでいるからだろう。

さて、成田総長は、先にも述べたようにもともと大吉寺の住職である。そして報国寺の住職でもあるのだが……。

事前の打ち合わせてその話を聞いた時、思わず一人でいくつもの寺を持てるものですか、と編集部に聞いてみた。すると兼務住職というシステムがあるという。たとえば急に住職が亡くなり次の住職が入るまでの間とか、諸事情で後任の住職が決まらないとか、あるいは小さい寺で住職のなり手がいない、といった時のいわば応急処置的なシステムだという。

報国寺の場合も例外ではないという。そこで一応次の住職候補の副住職に単刀直入に聞いてみた。報国寺副住職は同じ水海道にある宝珠院の住職である瀬戸隆海上人だ。

瀬戸上人は困った顔もせず答えてくれた。その経緯をかい摘まむところだ。

報国寺末寺の宝珠院に生まれた瀬戸上人は大学卒業後の昭和五十三年、二十三歳で報国寺の先代三十五世に弟子入りした。



報国寺境内にならぶ歌碑。一茶、黒村、芭蕉の歌が刻まれている

施餓鬼会法要で本堂内はいっぱいになる。  
法話をされているのは東京千石一行院の八木季生上人



先代には子思を含め五人の子どもがいたが、後を継ぐ意思がないままに昭和六十二年に先代が遷化。いざそうなると大きい寺だけにいろいろな思惑が生じたらしい。しばらくは兼務住職もおけずいたが、平成三年に当時浄土宗の東京事務所の所長をされていた成田先生にお願いすることになり一件落着。

もちろん跡取り問題は寺に限らず、古今東西の難題である。跡を取るその跡が大きければ大きいほど話はこんがらがるものだ。

報国寺の場合は成田所長（当時）の兼務で丸く収まったのだが、多忙なだけに通常の寺の事は副住職となった瀬戸上人がこなしてきた。大きな法要や行事には成田住職が行うが、その他は指示を仰ぎ、実働は瀬戸副住職。

檀信徒の名簿作り、過去帳の整理、本堂修復、団体参拝、五重相伝、開山堂建立、そしてこの十月の客殿庫裡の建立と、忙しい毎日だったようだ。さて、それではいつまでも成田住職の兼務かという、そうはいかないようだ。副住職は今後の事については「明日のことは明日のこと」と、さらっとしている。むしろ、

「住職の成田先生が宗務総長になられ、まさに看板スターとして檀信徒の皆さんはとっても喜んでくれました」という。

しかし、僧侶としての目標はという問いに、「檀信徒に安心を与え、やすらぎを持てるような教化を。そしてみんな平等に参加でき



報国寺と並ぶ水辺道の名刹、報恩寺。親鸞聖人とゆかりの深い浄土真宗の寺院だ。

る環境作りを目指します」と答えられたが、安心、やすらぎ、平等という言葉が出てくるところに、その苦勞が忍ばれる。

取材当日は施餓鬼会だったが、四百人近い檀信徒がお参りに来ていた。数年前は百人ぐらいだったというから、副住職の思いや努力が伝わっている証だろう。

さて、施餓鬼会に四百人という報国寺は、檀信徒千二百軒、寺領一万二千坪という大寺である。開山は弘安二年（二二八一）で、それまで真言宗だった寺が浄土宗に改宗されたもので、開山上人は浄土宗の三祖良忠上人である。この改宗のいきさつには面白い言い伝えがある。

報国寺の北東、約四キロメートルの<sup>おおのづま</sup>大生郷町にある日本三天神のひとつ、大生郷天満宮の縁起にこうある。

鎌倉の光明寺を開いた良忠上人が晩年この地を訪れた時のこと。いく晩か泊まって浄土宗への改宗を勧めるが村人は誰ひとりとしていうことをきかない。そこで良忠上人は龍宮にお参りしてみると報国寺前の下沼に飛び込んだ。そして翌日に龍宮からのお土産として愛宕貝を持って沼からあがってきた。それを見て、大いに驚いた村人は皆ことごとく改宗した。

これが実際の話であるか否かは、良忠上人の晩年の居所や、その内容からも信憑性に欠けることもあり、定かではない。だが、当時

こちらでも水海道を代表する名刹、弘経寺。浄土宗の寺院で関東十八檀林のひとつに数えられている



真言宗や天台宗といった在来の仏教に対して、新興の浄土宗や浄土真宗が入り込むにはこうした話が生まれるほど、上人たちの努力や創意工夫があったということだろう。

ちなみに報国寺境内に貴重な板碑が残っている。光明真言が彫られていて、報国寺が改宗前には真言宗だったという貴重な証拠となっている。

さて、関東に浄土宗を根付かせた良忠上人、そしてその弟子、さらに後世に教えを伝えた上人たちがこの茨城にいくつもの名刹を開創しているの、紹介しておこう。

まず弟子の性真は浄土宗の藤田派を立て、高聲寺を開創。水海道市のとりの岩井市にある。その弟子持阿は藤田派を確立、土塔派ともいわれ岩井市のとりの猿島郡に無量寿寺を開創。また良忠から続く浄土宗の六祖の了實は水戸の北、瓜連に常福寺を開創。その弟子で七祖の聖罔は水海道に法性寺を、東京小石川に傳通院を。その弟子の八祖聖聰は東京芝に増上寺を開創。九祖の良肇は水海道市に弘経寺（通称飯沼弘経寺）を開創している。

このうち常福寺、増上寺、弘経寺は関東十八檀林といわれ江戸時代には浄土宗の学問所として大いに権勢をふるっている。つまり浄土宗の関東での躍進はひとえにこうした上人たちの、この常総の地、茨城での布教実践と行動力があってこそなのだ。

大生郷天満宮の近くに現る坂野家住宅。中世土豪の居宅で現在も住居として使われている



こうした浄土宗の布教以前にこの地に根付いたのが、浄土真宗である。越後からこの地に迎え入れられた親鸞聖人は、笠間市にある西念寺を関東布教の拠点としたのである。いうまでもなく親鸞聖人は法然上人の弟子だが、この二人の共通の弟子であった性信が浄土真宗布教のおおきな役割を果たしている。報国寺近くにある報恩寺の開山が性信である。

このほか二十四輩と呼ばれる浄土真宗の寺院が茨城にあるが、これは親鸞聖人の二十四人の弟子が開いた寺のことである。

宗派は異なってしまったが、法然上人の教えを汲んだ名僧が関東の地の、ここ茨城で念仏の花を咲かせたのである。

施餓鬼会当日の取材となったことは先に書いたが、報国寺ならではのお供え物がある。天麩羅と西瓜である。それぞれ秋葉家、植竹家からのお供えだ。なぜ天麩羅と西瓜なのかはつきりわからないが、施主の両家はともに水海道の豪族の子孫である。

もともと水海道には戦国時代に根をおろした高原氏、そして田村氏があるが、この両家もやはり土着した武士だという。郷土史を調べていたら水海道豪族屋敷村図という資料を見つけた。簡単な絵図だが、そこには秋葉、高井、黒島、五木田、土井、片平、富村、吹上といった屋敷が記されている。

その資料によると敗残流浪の武士が落ち伸びた先に住み着き、そ



本堂斜め前の報国寺鐘楼

ここに村落ができあがり、やがて周辺の農民をまとめて領主、豪族となつていったとあり、この水海道はまさにその典型だという。

現在も報国寺にはこうしたかつての豪族の墓が並んでいるが、開創からずっとこの辺りの大寺であつたことは疑いようもない。徳川時代の本末制度によつて、十八檀林の飯沼弘経寺の末寺となつた報国寺だが、それでも報国寺自身、四力寺の末寺を有していたという。これをもても本当に多くのしかも力のある檀信徒に支えられていたことがわかる。

その檀信徒のための客殿がこの度落成することとなつた。本堂修復、開山堂連立に続く、報国寺のさらなる興隆への記念事業である。

そして続いて十月末日から五重相伝が行なわれる。平成四年に続くもので、四百人の参加者を予定しているという。

四日にわたる五重相伝だが、第三十六世成田住職、瀬戸副住職、そして近隣ならびに有縁の寺院の僧侶による読経が、そしてこの名利を支える多くの檀信徒の念仏の声が、報国寺境内に響きわたるに違いない。

(ルポライタ)



表紙は語る

# 車窓から

写真と文

## 川井 聡

月

乗降客の途絶えた  
駅には哀愁だけが残る  
あるいは不意に  
客車の窓の木枠から  
懐かしい旅  
の記憶がよみがえる  
鉄路の果てに  
彩いていくひとり  
ひとりの人生

### 山陰本線 竹野——佐津

兵庫県

都会と違って、そんなに変化しない気のする田舎の車窓ですが、よく見ていると少しずつ全体に変化しています。

たとえば刈り取った稲を干す稲木（いなき）。10年あまり前なら5～6mの高さに及んだものですが、最近では、収穫や乾燥もすべて機械でこなし、バーナーで強制乾燥することが主流になっているそうです。

稲木を組んでいた人々たちも高齢化し、車窓で見かけても低いものがほとんどです。

ただし、こうして干した米はやはりうまいらしく、たんぼで出会った自称「へんこもん（かわりもの）」の男性は、「比べれば」そんなもん味がちやう（ちがう）わいや！」とはつきり言い放ちました。旅の味わいも、米の味わいも薄れてゆくのでしょうか？

かわい さとし 現在、国内の鉄道旅行ガイド制作のため、日本全国のローカル線と温泉をめぐる取材中。自宅より取材先にいる方が長いらしい。

連載

# 撰採集を 拝む (四)

須藤隆仙

法然上人鑽仰会理事  
函館・称名寺住職

## ●三部経の制定

もう四十年ほど前のことですが、ある市の在家仏教会に毎月のように仏教講義を頼まれて出講したことがございます。私はまだ三十歳にもならない若僧でありました。今思えば脇の下から汗が出るような話なのですが、集まられる方々がとても熱心な方たちばかりなものですから、身の程も考えずに話をさせていただいたものでした。そのとき会員のなかに真宗のちやきちやきの方がおられまして、さかんに法然上人と親鸞聖人と、どちらが偉いかといった意味のことを質されるのです。親鸞聖人は悪人往生説で念仏も一遍でよいといわれているのに、法然上人は善人往生説で多念主義である、といったようなことが論鋒のようでありました。

今はもうそういうことはありませんが、当時はまだそういった法然上人・親鸞聖人比較論のようなものが盛んでありまして、共産党

の林田茂雄氏が親鸞聖人を讃えて法然上人をさんざんにけなす本を書いたこともありました。私は若気の至りて宗教新聞にその反駁文を書いたりしたものです。のちに真宗の碩学曾我量深先生（りやうしん）が、「法然上人を悪くいつてはならない」というようなことを信仰雑誌に書かれました。

そんな時代でしたから、真宗の信者さんには、親鸞聖人のほうが法然上人より偉いんだといったがる方がけっこうおられたのです。右の会員さんもその一人でありまして、私はかなりどぎつい質問を受けたこともございました。あるときの講義で私は、法然上人が浄土三部経をご制定になられたことを話したのでした。するとこの会員さんがひじょうに驚かれて、これまで自分は法然上人に対して誤った考えをもっていました。浄土三部経をご制定になられたとなれば、法然上人こそが浄土教の大祖師であられる、と告白されたのであります。私は、「だから元祖様と申し上げるの

です」と答えさせていただいたものです。

この話にありますように、元祖様は偉大さというものは、至るところみな偉大なのでありますが、とくにこの浄土三部経の制定というところが、世界仏教史の上でも特筆すべきことなのであります。そして『選択集』こそは、前記のように、この浄土三部経の宣揚書なのであります。

## ●一切経の教え

元祖様はどのようにして膨大な一切経のなかから、仏説無量寿経・仏説観無量寿経・仏説阿弥陀経の三典を「浄土三部経」としてお選びになられたのかと申しますと、元祖様自ら、善導大師の『観無量寿経疏』など六点の先師著述によられたといっておられますが、（漢文『阿弥陀経釈』、その裏付けとしては、早くに曇鸞大師が『往生論註』で「釈迦牟尼仏、王舎城および舎衛国に在して大衆の中にあって無量寿仏の莊嚴功徳を説きたもう」と



教示されたことによると考えられます。王舎城では即ち無量寿経と観無量寿経とが説かれ、舎衛国では阿弥陀経が説かれているからであります。ですから、王舎城と舎衛国で無量寿仏（阿弥陀仏）のことをお説きになられたということとは、この三経を説かれたということなのであります。

元祖様は、この三経は「正しく往生浄土を明かす教え」が説かれているのだとご教示なされました（『選択集・第一章』）。そして「およそ三経の意を案ずるに、諸行の中に念仏を選択して、もって旨歸とす」と仰せられたのであります（同第十六章）。つまり、この浄土三部経というものは、いろいろな仏道修行のなかから称名念仏の行を選ぶ、ということが最終目的なのだ、というのであります。このようにして元祖様は、往生浄土と称名念仏との二つを基準とされて三部経を選定されておられるのです。『選択集』が浄土三部経の宣揚書としての意味をもつものであることは前述

しましたが、その構成においても、第三章より第六章までは無量寿経により、第七章より第十二章まで（九章は別）は観無量寿経により、第十三章より第十六章までは阿弥陀経によつて述べられているのであります。また『選釈集』が十六章で構成されているのも、観無量寿経が十六観から成るのに拠つたのだとの説があるのてあります。

『選釈集・第一章』には、「三部経」の名に前例があることを挙げて、法華の三部・大日の三部・鎮護国家の三部・弥勒の三部などを紹介しておりますが、しかし今日の社会で三部経といえは、たいいてい浄土三部経を指すのであります。とくに浄土信仰の篤い所では「三部経様」といつて尊ばれているのであります。

元祖様はまた、「一切経は、おなじく釈迦一仏の所説なれども、宗々の所學にしたがいて浅深勝劣不同なれば、いずれの宗の一切経というべし。天台宗の一切あり。華嚴宗の一切



経あり。ないし法相・三論にも、おのおの一切経あるべし。天台宗の一切経のなかには法華をすぐれたりとす（略）華嚴宗の一切経は華嚴をもちてすぐれたりとす。三論には諸大乘経・顕道無異とはいへども、般若を以て至極とす。法相には解深密経を以て真実とす。かくの如く各々所解不同なる」（『勅修御伝・五』）と仰せられておられるのであります。これは仏教というものを解する上で大変に大切なご教示であります。仏教入門の第一に学ぶべきことがらであります。仏教は多くの宗派に分かれております。そして互いに自宗こそ最高最勝のだと誇つてゐるわけであり、見様によつては我田引水に汲々としてゐるやうにさえ見えるのであります。ですからこれに眉をひそめる人もおります。元祖様はこれについて正しい知見を教えられたのであります。宗というものは、広大な釈尊の教えに対して、それぞれの建て前をもつて教義を構築してゐる、体の病が各人各様である如く心の

病も各人各様なので、それでさまざまな宗派が立てられているわけであります。そしてこれには、それぞれ行者に適った<sup>かな</sup>經典が尊崇されますから、宗々によって經典の見方が変わっている。天台宗では法華經を最高位に置く。

三論宗は般若經を、法相宗は解深密教を、といったぐあいであります。そのところをきちんと認識しておりませんと、仏教というのは、それぞれ自分勝手なことをいつていてではないかという疑念になってしまいます。

そのところを元祖様はきちんと教えられたのです。釈尊のお説きになられた一切經ではあるけれども、教義を構成する立場立場によって各經典に対する見方が違ってくるのだから、「いずれの宗の一切經というべし」と教え、天台宗には天台宗の一切經、その他、宗々にみなその宗の一切經がある、と、こういうご教示であります。



## ●浄土三部經が頂点

江戸時代中期、大坂（現、大阪）に富永仲基<sup>とみながなか</sup>という人がおりました。商人の子でしたが、非常な勉強家で、『広辞苑』などでは「思想家」と説明をつけております。広く仏教や神道・儒教など学んで文化比較論のようなことをやった大変な人ですが、この人が仏典を読んで、各々その説くところが矛盾するといって騒ぎ立て、經典の大部分は釈迦の説いたものではないということをして『出定後語<sup>しゅていごご</sup>』という本にしたのであります。出定とは悟りから出てきたという意味で、釈迦出定の後の語という意味です。この説は排仏家たちに大いに喜ばれ、後年、平田篤胤<sup>あつね</sup>などはこれを模して『出定笑語<sup>しゅていしょうご</sup>』という本を書いて仏教を揶揄したものでした。

たしかに經典は、表面だけを読むとそのような感も受けるのですが、よく信心の目で拝読いたしますと、そこには深い深い真理が蔵

されていることが分るのであります。例えば『阿弥陀経』では阿弥陀仏の寿命は無量無辺であると言われておりますが、『観音授記経』などには阿弥陀仏も入滅すると説いてあるのであります。表面的に見れば矛盾であつて、現に最近、これを発見したとかいつて騒ぎ立てていた浄土宗の坊さんもおられました。道綽禪師は、それは隠没の相といつて、無量寿の仏でも一時身を隠されることがあるのですよ、と教え（『安樂集』）、浄土宗三祖良忠上人は、釈尊の巧言です、とも教えておられるのであります。巧言とは善巧方便といひまして、仏が衆生を善導するために巧みな言葉を使われることをいうのであつて、阿弥陀様も入滅されることがあるというと、私たちは驚いて、いっそうお念仏を称える、そのための方便ということであります。ちょうど、日食になりますと、平時の太陽の有難みを知るのと同じ意味であります。ですから私たちを救う救済仏（報身仏といふ）には、必ず隠

没の相というものがあつたのだと『究竟一乘宝性論』という書物に説かれていたのであります。

こういったわけでありまして、仏教經典というものは、平面的に○×式のような感じで接してはいけないのでありまして、立体的に相互關係を味讀していくという態度が必要なのであります。

そうなつてきますと、その信仰信仰によつて、經典の扱い方というものが變つてまいります。一切經という膨大なお経が書棚にあるとすれば、いつでも拝読するお経様は、当然一ばん奉持し易い棚に納めて置いたりするてありましよう。そういった物理的なこと以外にも、心の中には、自分の信仰と最も縁の深い經典を頂上に置いた一切經というものが印象されるてありましよう。即ち、浄土宗であれば浄土三部經を頂点とした一切經の山が築かれるのであり、天台宗であれば法華經や天台三大部というものを頂上にした一切經が出

来上る、真言宗であれば大日の三部経を頂上としたもの、というふうに、それぞれの信仰によって經典の組み合わせ方というものが違ってくるわけであります。そのところを元祖様は、「いずれの宗の一切経というべし」と教えられたのであります。まことに、普遍的なというか、妥当的な科学的な態度であります。このようなご人格を祖師と仰ぐ幸をしまじみと感じる次第であります。

## ●選択は摂取なり

こういった元祖様のみ教えに信順してまいりますと、「選択」ということの意義の深さに気付かせても頂けるのです。『選択集・第三章』に選択の語をご解釈になられた箇所がいくつかありますが、そのなかで『無量寿経』では「摂取<sup>せつしゆ</sup>」ということが説かれているのであって、「選択と摂取と、その言異なりといえども、その意これ同じ」と仰せられておられるのであります。その前に「選択とは即ちこ



れ取捨<sup>しゆしゃ</sup>の義なり（略）大阿弥陀經の選択の義かくの如し」とあるのであって、『無量寿経』の異訳経である『大阿弥陀經』では、選択ということは取捨の義になっているが、『無量寿経』では、むしろ摂取の意味が強いのだ、というご教示であります。

これは今日、私たちが「選択」という語を心中に頂戴していくのに、大変大切なポイントでありまして、今この選択集奉戴八百年に当たり、このことをよくよく銘記しておく必要があると思うのであります。これまでは、選択とは単に取捨の義だというふうに考えられてきたのであります。元祖様の御意としては、むしろ取捨よりは「摂取」のほうにウェイトをおいていられるのであります。選択とは、取捨というよりは摂取なのであります。

ですから『選択集』をよくよく拝読いたしますと、念仏以外の行は「捨てよ」と仰せられてはいるものの、それは救済の一道を直進せよということでありまして、余行を無視せ

よとの教えてはないことに気付くのであります。『選択集・第四章』でははっきりと、「異類の善根をもつて念仏を助成す」と仰せになられておられるのであります。「異類の善根」とは、念仏以外の善行のことであります。さらにこのことは、「衣食住の三は念仏の助業なり。これ即ち自身安穩にして念仏往生をとげんがためには、何事もみな念仏の助業なり」（『念仏問答集』）と広い意味に昇華されてもいるのであります。現に元祖様は津戸三郎という信者へのご返事に、「この世の祈りに、仏にも神にも申さん事は、そも苦しみ候まじ」と仰せられて、現世の幸せを仏神へお願いすることは、悪いことではありません、と教えておられるのであります。

そのように、選択ということとは、どんどんと片方を無視していつて、仏教を狭い薄っぺらなものにするということではなく、むしろすべてのものを摂取して、そこに念仏を頂点とした信仰の大山を築く、ということなので

ありまして、拝読するほどに、そのことを分かせて頂けるのであります。

ですから浄土宗の大先達はみな、念仏頂点の信心のもとに、全仏教的大偉業を成しておられるのであります。「佛教大辞典」を完成された望月信亨博士（後に浄土宗管長）は、じつは辞典作製の目的は念仏の真義研鑽のためであつた、と仰せられたそうであります。

また、仏教の典籍全部（一切経とか大藏経と呼ぶ）を完備したかたちで刊行しようとの動きがあり、大正時代に実現されたのが『大正新脩大藏経』ですが、監修者二人のうちの一人は浄土宗の学僧渡辺海旭先生であり、編集の代表者は小野玄妙先生で、やはり浄土宗の坊さんでありました。『漢訳対照梵和大辞典』を著された荻原雲来先生も浄土宗の坊さんです。このようにお念仏の高僧が全仏教で活躍をなされておられるのであります。

（つづく）

身障者から学ぶ

連載第四回

# クラスの 子供たちと ともに



高木悦男

現在公立小学校では多くの学校で、三年生と五年生に進級するときにクラス換えを行うのが通常である。これは子供たちにより多くの友達と接して、「協調性」を育ててもらいたいという学校側のねらいである。

乙武君も三年生になったときクラス換えによって、三分の二は新しいお友達に替わった。そしてこのクラスも私が担任することになった。

初めにする仕事は、教室での子供たちの座席を決めることである。私は一年のときから学期の初めには必ず席換えを行ってきたが、乙武君の隣には、あえて個性の強いどちらかといえば自己中心的な子供を座らせてきた。これらの子供は皆ひとりっ子か末っ子であった。いわば小さいときから弟や妹の世話をした経験のない子供たちである。少子化の進んでいる今日、このような子が確実に増えているのである。乙武君は初め嫌そうな顔をしていたが、仲良くなるのにそれほど時間はか

らなかった。

乙武君は何でも自分ですようとすが、どうしてもできないことがある。ボタンの止めはずしやパンツの着脱などである。そのため体育の時間の着替えはどうしても友人の手助けが必要となり、隣の席の子が世話をすることが多かった。乙武君も個性の強い方なので時々摩擦もおきたが、その中でお互いが良い方向に育ってくれたものと信じている。

乙武君は入学以来、母親にバギーを押してもらって登校し、母親はそのまま廊下で待機することになっている。寒い季節には小部屋が与えられていた。

しかし、避難訓練は毎月行っていることだし、みんなが乙武君の行動についても理解できてきたし、万一の災害時でも私自身が、乙武君を含めたクラス全員に対応できる自信がついてきた。そこで、災害のときに備えて母親を待機させている意味がなくなってきたの

ではないかと考え、母親の待機を中止することとを区の教育委員会に依頼した。そしてそれと同時に、乙武君がひとりて電動車椅子を使い通学できるように、通学路の整備をお願いした。役所仕事は予算を組み議会で認められないと執行できないので日数はかかったが、区は用賀地域と上用賀地域の道路を整備してくれた。Y小学校及びY中学校への車椅子での通学は保証されたわけである。

そんな中、一部の父母から、

「身障者一人のために、税金を使って道路をなおすとは」

という声が、私の耳にも入った。そこで

「街そのものは、そこに住むすべての人が、まず安全に過ごすことができるところでなくてはならないはずだ」

と話した。乙武君一人のための街づくりではなく、街が本来持たなくてはならない、基本的な街づくりを目指しただけという考えから、「身障者一人のための街づくり」という考え方

ではないことを強調した。バリアフリーが叫ばれ出した今日からすれば当然の考えも、それを実行してくれた区当局は、大変な英断であったと感謝している。

この結果三年生になったときから、乙武君は電動車椅子を使い一人で登校するようになり、母親は家で待つという普通の家の姿となった。

乙武君のトイレは母親任せであったので、「どうなっていますか」と聞くと、「朝出かけにトイレを済ませておくと、夕方までは出たがりません」とのことであった。それでも心配で気をつけていたが、確かに学校にいる間はトイレに行きたがることはなかった。

三年生になったある日、乙武君とU君が激しく言い争っていた。口けんかである。乙武君は口は達者だし、頭も切れる方なので相手をやり込めてしまった。U君は、

「僕の方が正しいのに」

と涙を流して悔しかった。そこで私は、

「男の子だ、泣くのではない。そんなに悔しいのなら取っ組み合せ」

とけしかけた。U君は乙武君をじっとにらみつけていたが、

「僕にはできない」

と言って涙をぬぐった。U君にはそのとき勝ち負け以上のものが見えてきたのだろう。

取っ組み合せは必ず自分は勝つだろう。でも手足のない子に暴力を振るって勝ったところで、気持ちのいいわけがない。そんな思いが、「僕にはできない」の言葉になったのだと思う。

学校でのいじめ、妻に対する夫の暴力がマスコミによってたびたび報道される今日、小さいときから身障者とコミュニケーションをとるなど、人間の心を育てる場が、求められているのではないだろうか。

四年生の遠足は弘法山（神奈川県秦野市）への山登りである。乙武君の母親から、

「今度の遠足は山登りだそうですので、洋匡には遠慮させます」

との申し出があった。これは乙武君の意志ではなく、母親自身がバギーを押して山登りする自信がないため、このような申し出をしたことがわかった。そこで私は、

「一緒に行きましょう。何とかありますよ」と行くことを勧めた。

クラスの子供たちとも話をし、私がバギーを押し、バギーに綱をつけて子供たちが交互に引っ張ることを決めた。また同年のO教諭から、

「困ったら言って下さい。私がおぶって歩きますよ」

との申し出もあり、おぶり紐まで用意した。乙武家でも父親が、会社を休んで「僕が行く」と言っていたそうであるが、当日は雨で翌日に延期になったため、父親は出張が決まっていたので、やはり母親が参加した。

雨の翌日ということで、道はぬかるんでい

るし、滑るし、バギーを押しての山登りは大変であった。クラスみんなで乙武君を連れてゆくんだと話し合っていたので、子供たちがよく頑張ってくれた。泥まみれになって綱を引く子、車輪を持ち上げる子、車輪の泥を棒でとる子、すごい山登りであった。途中で休むとかえって疲れが出てしまうと考え、子供たちを励ましながらいきに頂上まで登りきった。頂上についたとき誰ということもなく、「やった！」

と全員で声が上がった。子供たちはみんな満足そうで、その顔はいきいきとしていた。後から登ってきた他のクラスの先生方も、

「よく登ったね」

と子供たちを褒め、また、母親は、

「私はやっと登ってきたのに、どのようにして登ったのですか」

と感謝で目を潤ませていた。

今の学校には、子供たちみんなが助けあって何かをなし遂げる場が少ないのではないだ

ろうか。強い子が弱い子を助けて一つのことには挑戦する場、その必要性を強く感じている。たとえば六年生が運動会で行う競技で、頑強な子が土台になり、軽い小さい子が上に立つ組体操をしたときに、観衆から喝采を浴びて嬉しくていきいきとなった子供たちの顔は私は思い出す。しかしこの組体操も、危険が伴うためか最近では減っていると聞いている。

私は乙武君が四年を終了とともに退職である。その三年になった年学校長から、

「君の後、乙武君の担任は誰にしようか」

と相談を受けた。私は即座に、乙武君が入学のとき一年生の担任を希望した若いO教諭を推薦した。そしてスムーズにバトンタッチができるように、乙武君が三年のときから、同学年をもてるように学校長に依頼した。乙武君を近くから観察することと、近くにいれば乙武君と話す機会も多いと考えたからである。そしてO教諭と私は四年生で同学年を持った

のである。

乙武君を四年間担当して心に引つかかっていることがある。それは一年生のとき、一学期間は六年生が掃除をしてくれるのだが、六年生の都合で掃除が行われないうとき、

「各自、机の回りのゴミを、ひとり十個ずつ拾いなさい」

と言って子供たちに拾わせたことである。

乙武君は顔を床につけるようにして、口でゴミを拾い始めた。ゴミといっても紙切れが

多いので私は初めじつと見ていたが、紙は子供たちに踏まれて汚れている。「なるべく大きいのを拾うように」と慌てて指示したが、乙武君にはどのように対応すべきであつたか、未だに私がしたこと正否は疑問である。

五年生の担任は決まつたし、私自身も何らかの形で、間接的にこれからも乙武君の世話ができるように、区に囑託を希望して、昭和六十二年三月三十一日、四十年間の小学校教諭を退職した。(つづく) (元公立小学校教諭)

京都一千年の歴史に

育まれた巧みの技

京仏壇・佛具は当店に!!

☎ 六一五—〇八八四

京都市右京区西京極郡町一〇三番地三

(株) 島津法衣佛具店

☎ 〇七五—三一四—七七六八

FAX 〇七五—三一五—三七五三

御法語に聴く

縁なき事は、わざと人のすすめ候にだにも、かなわぬ事にて候に・・・・もとより機縁純熟して、時いたりたる事にて候えばこそ、さほどに専修の人なんどは候らめ。

津戸三郎へつかわす御返事

御教えをお伝えしようにも、御縁のないことには、人がわざわざ勧めても叶わないものですが、・・・・その人の資質と御教えを受け入れるだけの条件が相い整い、お念仏との御縁が結ばれる時が自ずとおとすれたからこそ、あなただの周りに、それほど多くの専修念仏者が集まったのでありましょう。

焦らずとも実は結ぶ

秋です。

遙か黒姫高原のコスモス畑には風情を求める観光客で溢れ、何万本ものコスモスの花が風と戯れていることでしょう。

さて、突然ですが、皆さんの感性をテストしてみたいと思います。次に挙げる俳句の○の部分に当てはまる言葉を考えてみて下さい。

- ① コスモスとりんどうの声○○○になる
- ② さいているコスモスコスモス○○○○○
- ③ ○○○○はきらいコスモスゆれている

ヒントを出しましょう。これらの句はすべて、ある小中学生俳句大会の入賞句で、①は小五の女子、②は小四の女子、③もやはり小五の女子の作品です。いかがです。えっ、はやく答えを教えろですって。もちろんお教えはいたしますが、そう焦って先を読まず、はたして、どんな言葉が思い浮かびますやら、秋の夜長を楽しんでみませんか。

想像してみてください。①は花々がおしゃべりをしているのです。たとえば恋の相談かも知れません。花たちの息づかいが、高原の「風」とな

って少女の耳元に吹き寄せてくるのです。夢見る少女の俳句です。

②はどうでしょう。この答えの意外性に少々呆氣にとられるかも知れませんが。群生するコスモスが楽しげに咲いているのです。それを見ていた作者まで、なんだかウキウキしてきて歌いたくなってしまうた。そんな気分を素直に口ずさんだ、リズム感じっぱいの俳句です。答えはなんと「ララララ」。でも、これがピッタリではないですか。

③は少し考えさせられます。きらいと言うからには、なんとなく寂しげな、少し悲しい気分をコスモスに託しているのでしょうか。ひよつとしたら誰かに慰めてもらいたいのかも知れません。きらいなのは「かげぐち」。抱きしめずにはいられない、そんな気分になされる俳句です。

さて、いかがでしたでしょうか。もしこのテストの結果を集めてみたならば、おそらく千差万別の答えが返ってくるに違いありません。

テストとは申しましたが、もとより、感性に正解を求める必要などありません。人によってもものの感じ方は千差万別であるという、至極当然な事実を確認してみたかったです。

ところで法然上人のお弟子に、津戸三郎為守という方がいらつしやいました。十八歳にして石橋山の合戦に馳せ参じ、以来、源頼朝に忠誠を

尽くした御家人でしたが、上洛の折、度重なる合戦の罪を懺悔して法然上人のお弟子となり、念仏の道に入られたのです。

三郎は一本気な性格であつたのでしょう。京から武蔵の国に戻った三郎は、教えのとおり、ただただ念仏に励みました。が、そこで彼はある「かげぐち」を耳にするのです。

「上人が三郎に念仏をお勧めになつたのは、三郎に仏教を理解する力がないからだ。学問に優れた人には念仏以外のことも勧めている」と。

三郎は心穏やかならず、上人に手紙をしたためます。上人の御返事は「阿弥陀さまは一切衆生を救われるのですから、学問があるとか、ないとか、そんなことで阿弥陀さまは人を選び分けたりはなさらない。そのような陰口はまったくの空事だから気にするな」というものでした。

意を強くした三郎はますますお念仏に励み、彼の周りにはいつしか三十名を越える念仏の同行者が集うようになっていたのです。近況を知らせるため、三郎は再び上人に手紙をしたためます。

冒頭のお言葉はその御返事の一節なのです。

信心というものは、無理強いをして具わるものではありません。三郎とて、法然上人に出会い、罪を懺悔する御縁に恵まれたからこそ念仏者

となつたのです。三郎の周りに大勢の念仏者が集うようになったことは、上人も確かに喜んだことでありましょう。その上で上人は、三郎の真摯な態度もさることながら「お念仏との御縁がもう少しで結ばれそうな人がそれだけいたということなのですよ」とお諭しになるのです。

ところで、このお諭しは裏を返す必要があります。三郎がせっかく上人の御教えをお伝えしても、お念仏と御縁を結ぼうとしない人たちも大勢いたはすなのです。一本気な三郎のこと。いたずらに焦りを感じる彼の姿を、上人はどことなく嗅ぎ取ったのではないでしようか。

感性に正解はありません。「風」もよし、「ララララ」もよし。「かけぐち」だつてまた御縁なのです。悲しんだり、疑ったり、信心が湧くまでわざわざ遠回りする感性もありましょう。人は千差万別。しかし、だからこそ阿弥陀さまは一人も漏らさぬ平等の慈悲をお持ちなのです。南無阿弥陀仏と申せるその日まで、一人ひとりの感性を見定めながら、気長にお計らい下さっているのではないでしようか。

機縁純熟、自ずから実は成るのです。焦らずに待ってみませんか。

萩、桔梗、尾花、撫子、女郎

花、葛の花、藤袴。これが秋の七草です。恥ずかしい話ですが

筆者などは長年にわたって刈萱が入っているものだばかり思いこんでいました。

「せり、なすな、御行、はこべら、仏の座、すずな、すずしろ春の七草」といったように、舌頭にのせていくリズムがないのでどうしても少し覚えにくいところがあるですね。けれども如何にも秋らしい響きと、それに表記したときの漢字の美しさ

萩を見る俳句生活五十年

高浜虚子

典型的な秋の季語とつきあった長い歲月。大虚子といえども

俳句生活は楽しいことばかりではなかったのかもしれない。

女の香放ちてその名をみなへし

稲垣きくの

男の無情を恨んで身を投げた

## 秋の七草

女性の、その衣が朽ちて女郎花を生じたという話が謡曲にあるそうですが、実に迫力のある名前ですね。

撫子や狂へば老も聖童女

福田夢汀

一転して怖い句です。秋の七草、美しいけれどなかなか容易ならん相手ですね。

桔梗一輪死なばゆくての道通る

角川源義

坂野泰巨編

## 選 択 集 入 門

選択集十六章之図

本書は『選択集』の各章を絵図におこした「選択集十六章之図」(高田敬輔・画)と、各章を適切かつ端的な言葉で解説した堀尾貫務上人による『選択集十六章図略解』の要文を左右の見開きページに配し、『選択集』の大意を知る最良の入門書である。

B5判・上製・本文五六頁(二色刷)・定価 四千円(税込)

株式会社文化書院

千代田区飯田橋4-5-4

102-0072

TEL. 03-3261-0480

FAX. 03-3261-0480

連載

無明抄

# 不安への 道

秦恒平

6

不安ということが謂われ、シエストフやドストイエフスキーの文学がわが国に盛んにもたらされた時期があった。不安の文学。その遠景・近景にはキエルケゴールやハイデッガーの哲学があった。不安は近代の業病であつた。それが、そのまま現代に持ち越されたと言へるか、断絶した異質の不安か、軽率には語れない。不安は抜き難いと、世紀末も窮まるにつけて日々の剣呑な物騒な情報や事件とともに実感している。今日のうちにも何が起きるか知れない。

そんなことは当たり前な、太古以来の人間の環境だと断言もできる。ただ、だからといって不安が晴れも薄められもしないのも真実であり、そこには時代の不安があり、個人の不安があり、世界在るがゆえの根源の不安もある。不安が拭いされない不安もあり、それは信仰の足場が崩れている不安であるとも、宗教が失効している不安であるとも言える。

不安ですかと問われて、今日明日のことには困らない、安心していますと答えられるごく日常レベルの安心もある。もとより不意を天災に襲われ事故や人災に襲われかねない、あてのない安心に過ぎない。いや、その程度の安心すらもちにくい昨今になっていて、自分だけは大丈夫などということがいかに言にくい、権力をもち財産をもち健康である人であろうと、その程度のあらゆる一切を押し流して行くような世界の、時代の、得体の知れない不安に、みな、当面している。

不安。それが人間だ。だから、いろいろに「安心」を言わねばならない。人は、どの「安心」が本当に安心なのだろうかと漸踏みし値踏みして信仰や宗教に近寄った。それしか

ければ、それへ寄った。だが、いろいろに情報が増えると、人は「安心」の質を選び始めた。アドヴァンテージが、やや人よりに移動したとも言える。信じるまえに人のほうが「用いて」みたり「試して」みたりし始めた。利用者、使用者、ユーザーのように人が信仰や宗教を自分に合わせて選り分け始めた。いわば霊驗記を必要にしたのはメーカーである宗教の側であり、ユーザーは遠慮なく選別を始めた。そういう時期がいつからか始まって、同じ仏教の中にも宗派が生まれ、異なる祖師が生まれ、芯になる經典の差が生まれてきた。売り物の現世利益にもいろんな趣向や工夫が加えられ、説経や談義が生まれた。文芸も美術もそれぞれに活用された。信心に訴えるまえに俗人の官能や趣味に投じる「安心」と「有り難さ」の演出が大切にされた。あるところでは観音様を送り出して目を癒したり耳を治したりし、あるところでは阿弥陀様のお出ましを願って来迎と撰取不捨が説かれた。またあるときはお地藏さまが子供を可愛がられ、あるときは薬師如来が病苦を救われた。

仏教にかぎらない。「安心」を与えない宗教の成り立つ道理はなく、ただ「安心」への向きがちがつてくる。「仏法」によって心の安らぎを得て、動ずることのない境地が「安心」というものであるなどといっても俗人には安心が成らない。またそれは「仏法」だけに言えることではないのを、知るものは知っている。失礼ながら「鰯の頭」でも足りるといえば足りる。欲しいのは「仏法」ではなく「安心」であり、そのような「境地」に至る道や手立てや、出来れば保証書を頼むというのが、信徒になってもいいがと持ち込んでくるユーザーの態度であり本音なのである。

神仏に頼るという切羽詰まった頼み込みも有るけれど、数は少ない。正直のところ、そういう相手をだけしては宗門が建たない。イエスは、九十九匹の羊をおいても群れを離れた一匹の羊を救いに行くと言われたが、その後の教会のやってきた大筋は、その逆さまであった。だから栄え、だから衰えてきたのである。

「心を一点にとどめて安住させて不動なこと」を「安心」だと言ってみても、そう出来るのが他人でなくて自分自身でなくてはお話にならないと人は考える。私にも出来ますか、どうしたら出来ますかと、老人がハイテクの器械に絶望に近い好奇の眼を光らせるのに似た眼で、「安心の仕方」を求めてきたし求めている。執拗に、信心や宗教を「ハウ・ツウ」に引き摺り下ろそうとしているのはユーザーである民衆であり、それに答えながら売り込まねばならないメーカーの地位に徹しなければ流行らず、それはもともと根源でちがうことだという引き裂かれるような辛さを味わうのも真の宗教者であろうか。分からないから疑問符も付けておく。

この「観心」ということを強くいえば、これもまた仏法でなければならぬという保証がない。日立の器械でなければ掃除はできないとは言えない。ナショナルでも東芝の器械でも掃除が出来る。もっと別の、本質的か瑣末なことかはべつにして何か違いを説き明かさねば、つまりは決定的には人を寄せられない。掃除機のメーカーたちが、どの社で買っても掃除機は掃除機ですからと言うものか。だが、厳しいことに、ユーザーは思っている、どの社の掃除機でも同じだ、たいして変わりはないと。その上で、価格が安いとか、馴染

んでいるとか、たまたま出会って気に入ったとか、デザインが好きだとか、あの社の宣伝をしている女の子が可愛いとか、軽いとか、音が小さいとか、いろんな理由で、たいして本質的な理由もなしに掃除機を買ったり平気で買い替えたりしている。メーカーはどうか、それでいいのだ仕方がないとは決してあきらめていないだろう。

信仰の場合は、だが、信心の側にでなく、信心や安心を与える側でも、なにとはなしに神も仏もない、超越者は同じ一つ、唯の一つと、内心ではそう説きたい導きたいと考えている気味があり、それは、じつは、信じたい俗人の側ではやくに発生して、逆に宗門の人を刺激してきた内心の催しだとすら言える。

「神も仏もあるものか」というあくどい台詞を、否定と否認との意味でばかり俗人は使っていないかった。「神も仏も根はひとつ」「神仏の区別はもともと有るわけがない」という考え方は、じつは「安心」で魅力的なものは俗人には無かったであろう。こういう根の深い内心の願望や確信に抵抗して、信仰の対象にラベルを貼り、固有の名で売り込まねばならない現実の理由じたいを考えて行くと、そこには宗門宗派宗団の事情だけが残されて、信仰や信心の真実は空洞化してしまいかねない断崖に臨んでいることに気が付くという、事実そういうことが、深刻に有っただろう。無かった筈が、無い。

何がほんとうの目的かと問い、「安心」ですと迫られてしまえば、残された方法は、あくまで固有のメリットを説き明かし続けるか、神や仏とは名目上袂をわち、ひたすらに「安心法」を開発して与えるかになる。すでに宗教者ないし聖者と思しき人たちがいて、釈迦

もイエスも老子もなく、それらの教えをすべて包摂した「安心」を説いて大勢を集めてきた。わたしは、そういう例は聞きかじった程度であるから論評しないけれど、空や道や禅やマントラやタントラなどを、分け隔てなく批評的・実践的に「安心」へ結びつけて説いているのを聴いていると、もはや器械の種類やラベルにとらわれずにただ純然と掃除したり飯を炊いたりテレビを見たりしている気持ちがある。つまり銘柄への遠慮がない。

「安心」ということを具体的に説いてきたいちばんの宗派は浄土門であつたろう。まさに「安心決定」が目的の宗門だつた。阿弥陀如来の極楽浄土が信じられたなら「安心」は決定する。これは、凄いいことであつた。それも一念の「六字名号」で安心疑いなしと説き尽くした宗派まで出来てきた。正直に感想をいえばもうそれは仏教からはみ出て、それ以上の仏教である。解釈に出て解釈を越えてしまった実意の信心であり、きわめて貴重な錯覚ともいふべき真実行になっている。びつくりしてしまう。

釈迦に説法もどきだが、観無量寿経では至誠心、深心、廻向発願心を確立し得た不動の信念をもつて「安心決定」としている。大無量寿経の至心、信樂、欲生の三心を、阿弥陀経では一心をもつて「安心」に至るとしている。見分けがつくともつかぬとも確信してはいないが、文字通りに「安心」へ徑庭の差が見える。少なくとも、即安心とは行かぬ安心までの距離が見える。手順手続を踏まねば至れない点では、「南無阿弥陀仏が往生するぞ」と説いた一遍よりも難儀の感は否めない。同じわが浄土門でも、鎮西派、西山派、真宗のいう「安心」にも、あるいは厭欣心、菩提心、三心を満たして安心といい、あるいは領解の

三心といい、あるいはひたすらに阿弥陀仏を頼む信心を安心というように、主義主張に差が出ている。議論、宗論の歴史はあるのだろうが、差異を主張してのこすための議論なら、まさに議論のための議論ではないのかと、本当に本当の「安心」を得たい者はじれったい。なにを信じたら良いのか、迷って選べない、保証の限りにあらずと言われているようなものであり、そういう不審や不信の積み重ねて、今日の信仰枯渇の時代が増幅されてきたことは間違いないように思われる。

なるほど「有り難い」とはよく書けている。「安心」は、じつに「有り、難い」ものとして在るのだと思う。だがそう思うのは俗人である私であり、宗門の方が率先して「有り難さ」を肯定して売り出してもらっては困るのである。安心決定を空念仏にしているではない筈である。ばつと、なにかしら飛び超えて突き抜けてしまいう安心を発明して欲しい。

はた こうへい

昭和10年、京都市生まれ。同志社大学美学芸術学科卒。昭和44年小説「清経入水」で第5回太宰治賞受賞。平成3年東京工業大学教授。平成8年同退職。現在、日本ペンクラブ理事、日本文藝家協会会員。著書に「みこもりの湖（つみこ）」、「冬祭り」、「京都感覚」、「嵐山」、「死なれて・死なせて」、「親指のマリア」など、エッセイ、評論集、小説多数。すべてを「素恒平・湖の本」に収め、継続刊行中。



浄土の広場

FORUM

「浄土の広場」では  
読者の自由な参加をお待ちしています。  
詩、エッセイ、短歌、俳句、川柳、書評、映画評、  
TVウォッチング、紀行文、その他創作等。  
あるいは会員各寺院での催しの告知、報告など。  
どしどし編集部にお寄せ下さい。

# 浄土誌上句会

## ●墓参

〔特選〕 叔父たちの儲け話や墓参り

秋谷菊野

●「墓参」のような題は、正面から取り組んで行くことになりやすいが、この句は見事にその裏をかいた。こういう所に来てさえ、なお欲得を離れることができない、人間の業を浮き彫りにした。

〔佳作〕 墓参り四方山話に長居せり

上野卓誠

出無精の亡夫のはなし墓参り

きりぶち輝

車椅子車に乗せて墓参り

中島一子

亡き夫の背を洗うごと墓洗う

山口信子

## ●稲妻

〔特選〕 切りそろろう臨月の爪稲光

井口 栞

●あれこれお産の準備に余念がない。そろえる物に落ち度はなからう。爪を切るというのは、そういう一連の作業の締めくくりのよう

増田河郎子・選

な響きがある。窓にひらめく稲妻が、絶妙の  
取り合せになっている。

〔佳作〕稲妻や闇をつつきるバイクの音

佐藤雅子

稲妻や一瞬ビルを袈裟がけに

細田初枝

稲妻や朝から痛む親知らず

近藤啞々砂

玻璃ごしの稲妻について孫抱く

石原 新

●鶏頭

〔特選〕

百歳の指のささくれ鶏頭花

井村善也

●長寿社会とは言え、百歳はというところお  
目にかかれるものではない。鶏頭との取り合  
せて見ると、この百歳はまだ元気で、少しは  
畑仕事もできるのだろうか。指のささくれは  
正に勲章である。

〔佳作〕鶏頭や重工業の都市壊れ

大畑 等

鶏頭にしばし夕日のとどまりぬ

吉田ゆきゑ

風過ぎて鶏頭の色褪せにけり

大貫伸子

地蔵立つ道のわかれ目鶏頭花

一丁田美恵

●墓参

寺町の駅それぞれの墓参り  
水汲みの音響きけり墓参り  
小石持て線香立てむ墓参かな  
墓参り行くとび入らぬ墓を見る  
新しきシャツをはおりて墓参り  
墓参り笑う家族に足がある  
外孫に由來教えて墓参り  
富士山の頭霞んで墓参り  
子の無きを詫びつ先祖の墓洗う  
墓参り無いということ持ち帰る  
墓参り連れは出取り今むかし  
墓参り了えて至福の夕餉あり  
独りごとつぶやきながら墓参り  
紅さしたおばの名を読む墓参り  
遠景のひとりとなりし墓参かな  
墓参りパタヤんの歌うたいあり  
墓参り生涯重し父母の恩  
古き大銀杏切られて居りぬ墓参して  
傘立に杖も立てある墓参かな

●稲妻

稲妻やトイレの便座あたたかき  
稲妻や犬と見交わす顔と顔  
稲妻をただ受けとめる窓ガラス  
稲妻と犬の遠吠えふと目覚む  
稲妻や少女と消ゆる一輪車  
稲妻を窓より眺め皿洗う

芦名宗一  
井口吾郎  
井村善也  
植田規夫  
大貫伸子  
大畑 等  
加藤政男  
笠井亞子  
きりぶち輝  
近藤啞々砂  
西城信行  
佐藤雅子  
瀬川浩子  
田中丸葉子  
長谷川 裕  
古井戸白々  
細田初枝  
山本美代子  
吉田ゆきゑ

稲妻やコンニャクを煮る男なり  
稲光巡業力士のバス発車  
稲妻や犯人の顔現わゆる  
インク壺のぞけば遠く稲妻す  
稲妻や間違になりて風を請う  
稲妻や卵を割って黄身を得る  
稲妻や沖の小島を二分せり  
稲妻にビル呑みこみし女あり  
稲妻やふつと忘れること二つ  
稲妻に早々と麻の蚊帳吊る遠き日の母  
稲妻や東京湾のど真ん中

●鶏頭

鶏頭を境に田畑分かれゆく  
ブツチャーのおでこが割れて鶏頭花  
鶏頭の色なき色を残しけり  
鶏頭に風吹く犬の日曜日  
鶏頭は種子おつるまで可愛かり  
鶏頭を活ければふいの雨におう  
鶏頭の燃え急かざる、高き空  
気兼ねして行く近道や鶏頭花  
鶏頭や集いし家の前にあり  
鶏頭花紅く咲きおり仮設跡  
鶏頭を撫でれば種の跳ね返る  
鶏頭や父の仏壇笑いおり  
鶏頭の襦袢となれるも直立す  
葉鶏頭触れてみる指無職なり  
鶏頭や地球の丸く見える丘

笠井亞子  
きりぶち輝  
近藤啞々砂  
近藤十四郎  
田中丸葉子  
長谷川 裕  
浜口佳春  
古井戸白々  
増田信子  
吉田ゆきゑ

秋谷菊野  
芦名宗一  
井口吾郎  
植田規夫  
上野卓誠  
近藤啞々砂  
佐藤雅子  
きりぶち輝  
田中丸葉子  
中島一子  
長谷川 裕  
古井戸白々  
細田初枝  
増田信子  
吉田ゆきゑ

第二回浄土誌上句会のお知らせ

季題

枇杷の花

枯野

毛布

×切・十月二十日

発表・『浄土』十二月号

選者・増田河郎子(『南風』主宰)

- いずれの題とも何句出しても可
- 特選・佳作——賞品贈呈

応募方法

葉書に俳句(何句でも可)を書き、住所、氏名を必ず忘れないで下さい。

宛先

〒105-0011 東京都港区芝公園4-7-4明照会館内

月刊『浄土』誌上句会係

## ◆「どう死ぬか」を読んで

竹中信哉

九月号の秦恒平氏の文章「どう死ぬか」を読んで、二つの意味で驚きを覚えました。

ひとつは、秦先生がいわゆる現代知識人の代表的宗教観をお持ちの方なのだとわかったことです。またもうひとつはこうした文章ものつけてしまう『浄土』という雑誌の懐の深さです。

毎回秦先生の文章も楽しく読ませて頂いておりました。今回も前半は大変おもしろく読み進みましたが、後半になって考えさせられてしまいました。秦先生が地獄極楽観について「大事なものは安心して死ぬることであり、そのために極楽すら必要ではなく、まして地獄で脅すことに何の意味があるか」とおっしゃっていらつしやいます。これが先生のお考えなのでしょうが、その考えから地獄極楽をトリックと位置付け、「浄土宗、真宗

の僧侶は心から信じているのか、法然、親鸞はどうだったのか」とおっしゃっています。そして我々現代の僧侶に対して

「極楽や地獄を信じていますかと。人間が人間としていき、人間として死んでゆく上で、ぜひ必要な地獄極楽ですか」と問うていらつしやいます。また、最後に二つの質問をされ、「死後は在るか」「神

仏は必要か」と詰め寄っていらつしやいます。もともと二つ目の問いも、先生が感心している学生の答え、「死後は無い。在るように思っ生きて生きたいことが大切。」

「神仏の有無は考えなくてよい。よく生きるために神仏は必要とするのが、人間の智慧」というものからして、神仏の有無が含まれている問いのようです。

そしてこの問いを先生は、「よく生きる」ために必要な本質的問いとまでおっしゃっていらつしやいます。

しかし僧侶である私からすると、「人間が生きるにあたって」は、まったく次元の低い、意味をなさない問いとしか思えません。仏典を読めば、釈尊はこのよう

な問いには、「黙して語らず」答えなかったことを示しています。仏教では考えても答えるでないこと、意味をなさないことは「無記」として答える必要のないこととしています。

再度申し上げれば、こうした問題に対して、「在るかないか」という問いの発し方には、意味がないように思います。あえて言えば、「死後は貴方にとって、在ったほうがいいか、無いほうがいいか」という問いならば、価値があらうかと思えます。つまり科学的に実証されえない。信仰の問題を問うときの問い方が問題なのです。

死後の世界も神仏も「無い」とお思いの方にはなくていいのです。しかしなくては困る、あってほしいと思っている方にはなくてはならない存在なのです。人間の根源的な問題まですべて頭だけ、知の領域だけで判断されようとすることは、私には無理が在ると思いますが、ほかの読者はどのように思われたでしょうか。

(東京・隆崇院)

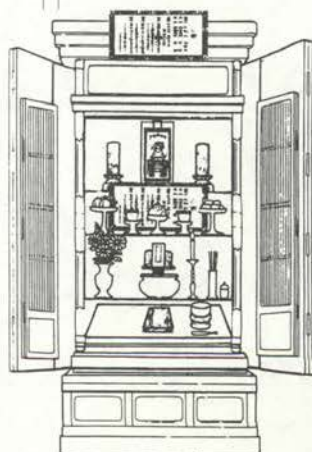
好評  
発売中!!

お寺から檀信徒へ

# 宗旨布教額

家の仏壇の上に掛けるものです。  
菩提寺とその宗旨がいつも  
ひと目で明確になります。

数をまとめて御注文下さい。



定価：大 (32.0×18.3cm) 735円／小 (27.3×14.2cm) 420円

注文・問合せは

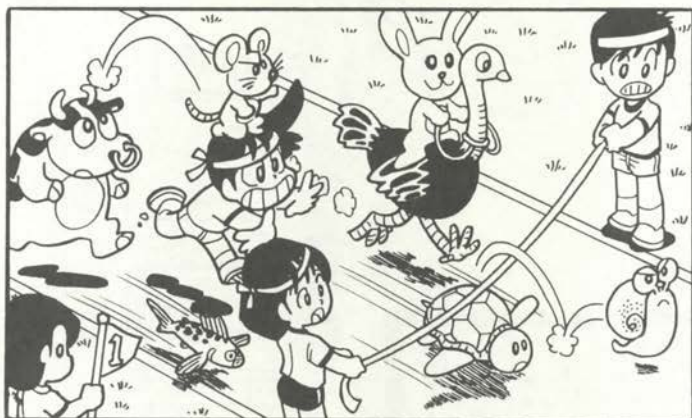
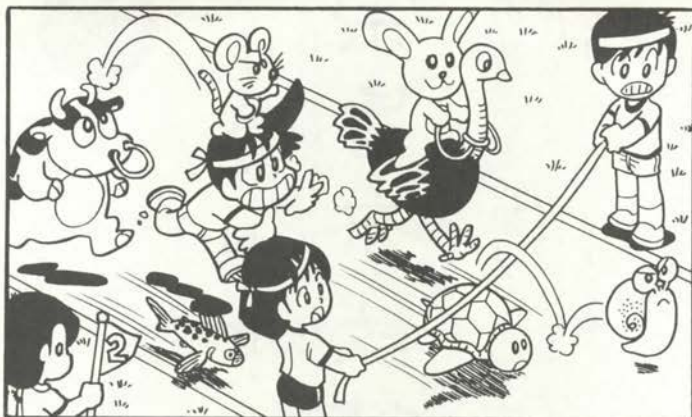
**法然上人鑽仰会**

〒105-0011 東京都港区芝公園4-7-4明照会館内

電話：03-3578-6947／FAX：03-3578-7036

「**イ**ばずる」

☆まちがいは7ヶ所あります。



まちがいさがし

答えは53ページにあります。

# 事務局便り

## ●新規会員登録紹介

購読会員

奈良 第三組 善福寺

滋賀 蒲生第一組 慶岸寺

群馬 前橋組 森巖寺

福岡 太宰府 井上勝正

東京 世田谷区 山口慎蔵

東京 武蔵野市 須藤政雄

敬称略

## ●読者プレゼント

### 『今からつづる家族への言葉』

㈱フェーズ・ツー（本社東京・篠田義彦社長）は、『今からつづる家族への言葉』を発刊した。書き込み本とガイド本が二冊セットになっており、ガイドに従って記入していけば、財産相続、病気になる場合の処置、希望する葬儀の内容などが家族に伝えられる仕組み。

葬儀のあり方、延命措置の是非などが議論を呼び、相続のトラブルも絶えないが、この一冊があればすべて解決するという。ガイド本には、法的効力のある遺言書の作り方、病に倒れた場合の希

望する治療法、葬儀のあり方など基本事項のほか、埋葬の方法など最新情報を盛り込んでいる。

サイズはB5判。上製本・化粧箱入り。定価6、

800円（税込み・送料込み）

通信販売による直販で、問い合わせ・購入申し込みは、フリーダイヤル（0120-0552173）へ



この本を『浄土』の読者に2名様にプレゼントします。

あて先▼〒105-0011 東京都港区芝公園4-17-4 明照会館内『月刊浄土』編集部読者プレゼント係



敬老の日死にたいの声聞きながら

岱潤

今年の九月末日で百歳以上になる長寿者が日本全国で一万人を超えたそうだ。当然初めてのことだ。一九九四年に五千人を超えたばかりというのだから、四年にして倍増したことになる。すごいスピードだ。

ある統計では、六十五歳以上の人の全人口に対する比率が七%を超えたのが一九七〇年で、これより日本は高齢化社会に入つたといわれているが、その比率が十四%を超えたのが一九九五年だそうだ。この間二十五年しかかかっていない。これは世界の他の国、アメリカが七十年、イギリス、ドイツが四十五年、フランスが百三十年かかっていることと比較すると、日本の高齢化社会の進むスピードが世界一急速であることがわかる。

そして先日家に来た保険の営業マンが、六十歳までに亡くなる人の比率を教えてくれた。なんと日本は千人に四人の割合だそうである。しかし日本人が一番多くかけている生命保険は、六十歳または六十五歳までに亡くなれば相当の保険金があるけれども、それを越えればその十分の一程度しか保険金がありなくなる、そんな保険ばかりであることを示してくれた。

つまり、日本人の老後に対する備えは、現実と合っていない、まったく不完全なものであるとの説明である。保険ばかりでなく先師のいない老後の送り方そのものに、多くのお年寄りが戸惑っているのか、敬老の日には決まって悲劇が聞こえてくる。『上手な老後の送り方』、これがこれからの日本人に課せられた大きな命題である。

(岱潤)

編集チーフ  
編集スタッフ

長谷川岱潤

斎藤晃道

村田洋一

石上俊教

佐山哲郎

間川彰道

編集顧問

大室了晴

浄土

六十四巻十月号 頒価六百円

年会費六千円

昭和十年五月二十日第三種郵便物認可

印刷——平成十年九月一日

発行——平成十年十月一日

発行人——真野龍海

編集人——宮林昭彦

印刷所——株式会社 シータイイー

〒一〇五〇〇一一

東京港区芝公園四十七四明照会館内

発行所 法然上人鑽仰会

電話〇三(三五七八)六九四七

FAX〇三(三五七八)七〇三六

振替〇〇一八〇一八二二八七



これが、  
ビヤホールの喉ごし。



ビヤホールの喉ごし

**サッポロ生**

**黒ラベル**



ビールは、20歳になってから。あきかんはリサイクルへ。①

●ご協力をお願い。自動販売機による酒類の販売は午後11時から午前5時まで停止されています。

サッポロビール株式会社



道路工事中



消火器



歩行者横断禁止



火気厳禁



止まれ



雷面ならせ



民衆近し、静かに



足元注意



踏切あり



非常口



放 煙



安心と安全をお届けするのは、  
このマークです。



さわるな



われ物注意



安全第一



手重注意



取り扱い注意

ここにあるマークの意味、わかりますか？暮らしの中には、注意を呼びかけるマークが、ほんと、たくさんあるんですね。生活のいろんな場面で、みんなが注意し合って、ルールを守っている。だからこそ、私たちは毎日を穏やかに、安らかに過ごせます。でも、万が一のときのために、覚えておいて頂きたいマークがあります。それは、あなたに安心と安全をお届けする、このマークです。保険のことは、あなたの街にある住友海上代理店へ。

安 心 と 安 全 を お 届 け す る

 **住友海上**

〒104-8252 東京都中央区新川2-27-2 TEL:03-3297-1111(大代表)